

**NIBS LETTER** 2008 JANUARY  
No. 548-特

# 日生研たより

2008年(平成20年)1月号 第54巻第1号付録(通巻548号-特)

## 創立 60 周年記念特集号

---

### 式 辞

.....上田 進 (2)

### 創立 60 年の足跡

.....布谷鉄夫 (3)

### 祝 辞

.....町田勝弘 (6)

.....森 晃憲 (6)

.....山根義久 (7)

.....佐々木伸雄 (8)

.....芹川忠夫 (9)

### 創立 60 周年記念シンポジウム

の開催..... (10)

### 創立 60 周年記念式典・祝賀会

を終えて..... (11)

### 財団法人 日本生物科学研究所

創立 60 周年記念誌「60 年の

歩み」の編集.....井土俊郎 (12)

---



NIBS

財団法人 日本生物科学研究所

NIPPON INSTITUTE FOR BIOLOGICAL SCIENCE

<http://nibs.lin.go.jp/>



## 式 辞

財団法人 日本生物科学研究所  
理事長 上田 進

本日ここに、財団法人日本生物科学研究所創立60周年を記念いたしまして式典を催しましたところ、ご来賓の方々をはじめ多数の方々のご出席を賜り、まことに光栄の極みでございまして、心よりお礼申し上げます。

当研究所は昭和22年3月、戦後の混乱のなか創立されました。当時の日本獣医師会の松葉重雄会長、近藤正一副会長、そして中村稔治元所長らによって民主的な獣医学研究所の設立が企画され、既に中村稔治元所長を中心に日本獣医師会傘下の独立研究所として立ち上げられていた比較病理学研究所と、日本獣医師会研究所が合体して財団法人日本生物科学研究所が設立されました。創立以来研究の中心として活躍された中村稔治元所長がこの研究所に抱かれた理想は、一つは近代的なワクチン製造技術を我が国に導入する先駆者となることであり、他はたとえどんな小さな作品であるにしても、筋金の入った研究を積み重ねて斯学や斯界に貢献したいということでした。基礎研究と応用研究という粗雑な篩い分けには収まらない、「根源的なものの追求」で貫かれた中村稔治元所長の思考は、理論的であるとともに実際のであり、いたずらに思弁の迷路に踏み込まれるようなことはなく、戦前に朝鮮総督府獣疫血清製造所、これは後の朝鮮総督府家畜衛生研究所でございしますが、ここでの牛疫にはじまり、ニューカッスル病へと発展したウイルス学的研究は、たとえどのような新しい実験手段が導入されても、ゆるぎのないものでございました。このような背景のもと牛疫生ワクチン、ニューカッスル病ワクチン、狂犬病ワクチン、日本脳炎ワクチン、インフルエンザワクチンを世に出して、家畜のみならず人の感染症の防疫にも寄与されております。一方、中村稔治元所長が研究指導や海外の技術指導に没頭できるよう研究所の経営を支えたのが荒井研元理事長でございま

した。荒井研元理事長は研究所の純粋性や税金関係を熟慮されて、社団法人日本生物科学研究所を、純粋な研究機関としての財団法人日本生物科学研究所と、ワクチン類を製造販売する日生研株式会社の二本立てにされました。昭和34年のことでございます。以来、日生研株式会社がワクチン類を製造販売した利益を、技術料の形で財団法人日本生物科学研究所に提供することによって、研究所の方は経営に縛られることなく自由に研究が出来るという、当時としては画期的な仕組みを作られ今日に至っております。経営危機を乗り越えて、今日まで研究の継続を可能にしたのは、荒井研元理事長と倉益茂實元理事長の並々ならぬご尽力の賜物と、あらためて謝意をささげる次第です。このように当研究所は、創立当初よりの中村稔治元所長と荒井研元理事長の当研究所にかける熱い思いを継承して今日まで発展してまいりました。これら有形無形の財産を発展させるべく、創立以来諸先輩を通して継承されてきた中村稔治元所長の「根源的なものの追求」を忘れることなく、これからもまやかしのない研究を実践して、斯学や斯界に貢献するとともに、荒井研元理事長をはじめ歴代の理事長が腐心された、理想的な研究所運営の確立を目指して努力してまいる所存でございします。関係各位のご援助ご協力に衷心よりお礼申し上げますとともに、今後とも一層のご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。最後に、ここにご列席の皆様方のご健勝とご多幸を祈念いたしまして、ご挨拶とさせていただきます。本日はありがとうございました。



## 創立 60 年の足跡

財団法人 日本生物科学研究所  
所長 布谷鉄夫

本日は、ご来賓の方々をはじめ多数の関係機関の皆様方には、大変ご多忙にもかかわらず財団法人日本生物科学研究所の60周年記念式典にご臨席を賜り、衷心より御礼申し上げます。

弊所が、その前身であります社団法人日本生物科学研究所として設立されてから今日に至るまで60年の長きにわたり、幾多の試練を乗り越えて設立当初の基本理念を貫きながら事業を遂行してまいることができたのは、偏に皆様方からのご支援・ご指導と諸先輩の研鑽によるものであり、改めて心より感謝申し上げます。この大きな節目を迎え、創設者達が歩んだ苦難の道と偉業、その後の諸先輩により築かれた幾多の輝かしい業績を顧み、設立の理念を今後も絶やすことなく継承し、組織発展に職員一同尽力し邁進していく決意を新たにしております。

社団法人日本生物科学研究所は1947年、立川の旧陸軍獣医資材本廠跡に設立され、その後1959年に農林水産省・文部省共管の財団法人への改組を経て、既に鶏病関連の研究部門として1969年から稼動しておりました青梅支所に1978年に統合し現在に至っております。研究所が立川に設立された当時は、戦後の混乱状態で多発した狂犬病や日本脳炎などの人獣共通感染症が広く流行し、悲惨な社会状況であったことが記録誌などに残されております。研究所に生物科学という広義の言葉が選ばれた趣旨については、生物科学という包括的な研究を対象とし将来の拡充発展の希望が込められたとされております。しかし、当時は家畜防疫が重要かつ緊急な課題であったことも反映し、定款には「人類の福祉を増進することを使命として家畜衛生に関する研究を行い、畜産の健全な発達と公衆衛生の向上に貢献する」がうたわれたことを、設立当初から研究所運営に尽力された荒井研元理事長が記録誌に残されております。

この設立理念の背景には、敗戦による学術研究の衰退を克服するため、国立機関による研究の寡占状態と独善を排して、自由の気に満ちた世界に誇るに足りる民間研究所を作り、真実の追究と実社会に役立つ成果を創り出すという、創設者の一人であった中村稔治元所長の不拔の信念があったということに折に触れ聴かされ、私ども後進への心の手引きとなって語り継がれて来ております。

研究所設立後間もなく、当時流行していた狂犬病、日本脳炎、鶏痘、豚コレラなどの感染症とそれらの予防法に関する研究がスタートしておりますが、その主導的役割を果たされたのは中村稔治元所長でありました。可能な限りの実験的証拠を積み重ねて事象の本質を明らかにし、その成果をワクチンとして実用に供された中村元所長の卓越した科学の進め方は、その著書「一獣疫研究者の歩み」から学ぶことができます。この著書は、本日記念品として皆様方にお渡しすることになっておりますので是非ご一読いただければ幸いに存じます。

中村元所長は戦前に朝鮮総督府家畜衛生研究所で“家兎における牛疫の感染”といわゆる“朝鮮鶏疫(鶏の疫病のことですが)”に関する一連の研究をされ、それらの内容は現在の斯学にも照らしても高く評価されるものと言われております。牛疫の研究では、当時ウイルス学の実験手技が乏しくまた高価な牛を用いることができない状況の中で、牛の代わりにウサギが利用できることを見出し、ウサギにウイルスを100代以上忍耐強く継代してウサギに対する病原性の増強と牛に対する病原性の減弱を臨床・病理学的に確認する一方、この現象を補体結合反応や中和試験を巧みに利用して解明し、その結果として牛疫の家兎化生ワクチンを生み出されました。また、1926年ころから東南アジアを中心に未知の病気として発生した“朝鮮鶏疫”の研究では、当初それま

で唯一の急性伝染病として知られていた”家禽ペスト”の異型と誤認されていた状況下で、流行例からの分離株と家禽ペストウイルス（すなわちトリインフルエンザウイルス）を鶏に実験感染させることによってそれら病態の違いを交差免疫試験や中和試験により詳細に調べ、流行疾患が家禽ペストとは異なる、（同じ頃イギリスで突発した）Doyleのニューカッスル病に一致することを証明しました。この研究過程で、分離株は鶏への感染を80代程度繰り返して継代すると病原性が増強されること、一方家禽ペストウイルスについてはマウスにウイルス感染継代が可能で、感染マウスを捕食した猫は非化膿性脳炎を起こし斃死することなどが明らかにされました。この”朝鮮鶏疫”の研究は、その後増殖効率の高い孵化鶏卵培養技術の導入による効果的なニューカッスル病ワクチンの開発へと発展しております。

中村元所長の研究は、病原体であるウイルスの宿主体内での動態とその病原性、宿主反応などに重きが置かれた、ウイルス感染症学あるいは感染病理学の基礎を築くものでありましたが、その中身は現象の本質を可能な限り追求することにあり、また同時に成果を实际应用するにあたっては十二分の科学的検証が重要であることを自ら説かれたものと理解しております。この実践的な研究手法と考え方は、後継の田島正典元所長が専門とされた形態病理学にも反映され、感染症を常に病原体と宿主との相互作用として捉えて双方を掘り下げた数々の研究に現れています。例えばマイコプラズマ感染症の研究では、病原体が組織・細胞内に侵入増殖することはなくそ

の特殊な末端構造物で上皮細胞に付着する表面寄生体であることを電子顕微鏡観察で突き止め、その予防免疫が不活化菌体の接種で誘導される液性抗体で有効であることの実証に導かれました。このように中村元所長が実践された物事の本質を追求する研究手法は、その後所内での基本姿勢として脈々と受け継がれ、ウイルスや細菌、そして原虫などの感染症研究と上田現理事長を中心に進められた免疫化学ならびに分子生物学的研究へと進展し、多くの学術的知見の蓄積とともに有効なワクチンの開発や診断技術の確立へと発展しております。

一方、設立当初からの研究の流れの中で、実験に用いる動物の質の重要性が認識されておりましたが、これを打開すべく、1966年には関連研究の推進に欠かせない良質な実験動物を自家生産できるわが国獣医学界初めてとなる実験動物研究所を、山梨県小淵沢に支所として開設しました。支所では、関係機関からのご指導・ご支援の下、施設面での整備・拡充が図られ、また研究面への助成をいただきながら、ウサギやニワトリ、ミニブタをはじめとする各種実験動物の作出・純化あるいはSPF化が進められ、それらは所の事業推進はもとより国内外の研究機関へ研究資材として寄与してきております。また、バイオリサーチを支える実験動物として、遺伝子改変技術やキメラ作出技術などによる特殊な形質を備えた動物の開発に向けても、日夜努力を重ねております。

1972年以降は、支所における生産動物の一部を用いた化学物質の安全性評価に関する試験・研究が本格化し、それらを推進するための専門家の育成と共に施設建設と拡充が図られました。そして、医薬および農薬等の安全性評価に関する試験・研究により培われた動物試験技術は、その後、環境電磁波の影響や内分泌攪乱化学物質の鳥類への影響に関わる研究へと発展し、時代の要請に応える新事業となっております。当研究所における生物科学の包括的な本格研究はこのように展開してまいりましたが、これらは種々な専門分野の研究者による自主的な企画を基に遂行されております。

研究所事業の進展と共に、成果の一部は東南アジアやインド、アフリカ諸国への技術協力として貢献してまいりました。その端緒は中村稔治元所長によるFAO（国連食糧農業機構）を介した牛疫ワクチ



ンの製造と診断に関する技術指導にあり、その後口蹄疫や鶏病ワクチンの製造指導のための技術供与、実験動物の飼育技術指導などとして海外から技術研修者を受け入れ、あるいは研究所から専門家を派遣し、現地の家畜防疫に協力してまいりました。また、国内においては関係機関への学術情報や研究資材の提供あるいは研修者の受け入れ、病性鑑定を通じての疾病診断および診断技術の提供、専門学会・研究会等の開催や会員・役員の派遣など、所外に向けた公益事業にも積極的に取り組んでまいっております。以上の内容の詳細につきましては、本日皆様にお配りする記念誌「60年の歩み」をご覧くださいければ幸いに存じます。

さて外に目を向けますと、この半世紀余り、社会環境も大きく変わり、生物科学領域における知の蓄積と技術革新には目覚ましい進歩がありました。特にこの数十年を振り返ってみますと、1967年から68年にかけてのDNAリガーゼや制限酵素の発見を皮切りに、遺伝子組換え技術、モノクローナル抗体作製技術、核酸の塩基配列決定法などが発明され、微生物を人為的に操作して有用物質を産生させることも可能となっております。1990年代から今世紀始めにかけては微生物からヒトや動植物にいたる生物のゲノム配列とその産物であるタンパク質の機能が解析され、生命を構成する要素や機能が微に入り細に入り明らかにされつつあります。さらに、1996年に作出された体細胞クローン技術によるクローン羊の誕生、続くヒト胚性幹細胞の樹立などは畜産現場や医療に大きな恩恵と無限の可能性を与えつつあります。これら生物学の進歩に伴い、感染症研究においても、各種病原体の侵入・増殖・免疫機構など宿主との相互作用が分子レベルで解明されつつあり、病原体については感染性や病原性、免疫応答の誘導などに関わる遺伝子の同定により、それら情報が感染症の迅速・高精度の診断、よりすぐれたワクチン開発による効果的な予防対策などに応用されつつあります。しかし、このような急速に展開されて来た科学技術の進歩の一方では、さまざまな社会問題が新たに顕在化してきております。その一例が人獣共通の新興・再興感染症の出現であり、新たな制圧、撲滅に向けての対策が急がれています。私どもはこのような変転極まりない社会情勢の下で発生する諸問題に対しても、新しい思考と技術を取り入れた、

自然と共生した安全・安心で質の高い社会の実現に資する研究に主眼を置きながら、全力で取り組んでまいりたいと思います。

自らの研究費を自力でまかなわなければならない民間研究機関を維持・発展させていくことは容易ではなく、今後幾多の艱難を乗り越えなければなりません。研究所設立時、実験用ウサギを購入する資金を賄うため、実験済みで無害のウサギを燻製肉に換えてその費用を捻出したという当時の厳しい研究環境に比べますと、現在はあらゆる科学情報や先端技術が利用可能な恵まれた状況となっております。しかし、ここに至るまでには、組織運営の困窮を乗り越えながら研究所維持に尽力された荒井研元理事長はじめ、先代理事長・役職員の苦節があったことを忘れることはできません。

現在、研究所は意気盛んな向学心に富む若者たちに恵まれ、外部研究機関のご協力や専門家のご指導を仰ぎながら、職員の育成強化とともに施設整備を図っております。単一の専門領域あるいは組織のみでは達成できないようなイノベティブな研究成果の創出を目指し、それらを社会現場で役立つものまで創り上げる、明確なアウトカムを想定した研究を推進してまいりたいと思います。そして、上田理事長の下、創立60周年を契機に創設者たちのパイオニア精神と理念を再確認し、新たな目標に向けて組織の使命と役割を明確に行動に移しながらより一層社会に貢献してまいれる覚悟でおります。

ご臨席の皆様方には今後とも変わらぬご指導・ご鞭撻を賜りますよう心よりお願い申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。





## 祝 辞

農林水産省消費・安全局

局長 町田勝弘

(代読 畜水産安全管理課長 境 政人)

本日ここに、財団法人日本生物科学研究所創立六十周年記念式典が挙行されるに当たり、一言お祝いを申し上げます。

貴研究所は、昭和二十二年に社団法人日本生物科学研究所として設立されて以来、六十年もの長きにわたり、動物の生理及び病理についての研究・調査を行うことにより、我が国の畜産の発展及び学術の振興に寄与されてきました。

これもひとえに、歴代理事長をはじめ、役職員の方々の日頃からの業務に対する御尽力と、関係者の皆様方の深い御理解と御協力の賜であり、深く敬意を表する次第であります。

さて、動物衛生や食品安全に関して、最近においても様々な出来事がありました。

まず、長年にわたって養豚業界の大きな課題でありました豚コレラについて、すべての関係者の協力の下、撲滅対策が実施され、本年四月一日付で、我が国はOIEの規定に従い清浄国となったところであり、改めて関係者の皆様方の御尽力に感謝申し上げます。

また、本年八月、我が国では三十六年ぶりに馬インフルエンザの発生が確認され、各地の競馬場等において感染がみられましたが、関係者が一体となっ

て防疫措置に努められたことにより、現在のところ、本病の拡大は防止されているところであります。

さらにペットフード、食品の安全確保に対する国民の関心が高まっていることを背景に、農林水産省といたしましては、ペットフードの安全確保対策を検討するため、環境省と共同で、有識者からなる「ペットフードの安全確保に関する研究会」を設置いたしました。これまで二回の研究会を開催し、ペットフードの安全確保に関する幅広い議論が行われました。引き続き、事業者・行政の取り組むべき事項等を幅広く検討していただき、十一月に中間とりまとめが行われる予定となっております。

このように、動物衛生、食品安全に対して国民の関心が高まっている中で、動物に関する研究・調査等を担う貴研究所の役割はますます重要となっております。

今後とも貴研究所が動物衛生、食品安全等を取りまく諸課題の解決に積極的な役割を果たされ、我が国の畜産の発展及び学術の振興に大きく寄与されることを期待しております。

最後になりましたが、貴研究所のますますの御発展と御出席の皆様方の御健勝を心より祈念いたしまして、私の挨拶といたします。



## 祝 辞

文部科学省研究振興局学術機関課

課長 森 晃憲

財団法人日本生物科学研究所の創立六十周年記念式典が開催されるにあたり、一言お祝いを申し上げます。

財団法人日本生物科学研究所は、昭和二十二年

に設立された社団法人日本生物科学研究所を前身とし、昭和三十四年に「生物科学についての学術研究を目的」とした学術研究機関として設立されました。

日本生物科学研究所は、「生物科学，特に動物の生理および病理」に関する基礎研究を行うことを通じて，獣医学分野，実験動物学分野等における研究者を育成しながら，数多くの優れた研究成果を生み出し，これらの分野の発展に多大な貢献をしてこられました。

また，研究活動にとどまらず，国内外研究機関等からの研修生の受入れや共同研究の実施，さらに海外技術協力事業として専門家を派遣されるなど，人材育成と学術交流においても大きな役割を果たしています。

その研究活動は，家畜の防疫衛生に関する研究から出発し，実験動物学，毒性学，そしてバイオテクノロジーによる新領域研究へと歩んでこられました。

非常に広範囲な研究を行うにあたり，そのために費やした時間や労力は大変なものであったと推察いたします。六十年の歴史を刻んでこられた歴代の理

事長，所長をはじめ，研究所員の皆様，そして研究所の活動を支えてこられた関係者の皆様に心から敬意を表します。

文部科学省では「第三期科学技術基本計画」を踏まえ，ライフサイエンス分野を含めた重点四分野の研究開発に引き続きしっかりと取り組むとともに，研究者の自由な発想に基づく独創性豊かな学術研究を着実に推進してまいりたいと考えております。公益法人の制度が大きく変わりますが，研究所におかれましては，引き続き，より一層の研究事業の推進と優れた人材の育成を通して，社会に貢献されることを期待いたしております。

最後に，本日ご列席の皆様方に，財団法人日本生物科学研究所へのさらなるご支援，ご尽力をお願いいたしますとともに，上田 進理事長をはじめとする関係各位の更なるご活躍を心からお祈りし，お祝いの言葉といたします。



## 祝 辞

社団法人 日本獣医師会  
会長 山根 義久

このたびは，貴研究所におかれましては創立 60 周年を迎えられ誠にありがとうございます。

私は先程ご紹介にあずかりました，日本獣医師会の山根義久でございます。日頃より，日本獣医師会の事業に際しましては，財団法人日本生物科学研究所の上田理事長先生を始めとした関係各位には，大変なご尽力を頂いております。高い所からで失礼ではございますけれども，この場をお借りして，厚く御礼を申し上げます。

特に一昨年 3 月，日本獣医師会三学会と日本獣医学学会合同の年次学会をつくば国際会議場にて開催しました折には，秋篠宮殿下ご臨席のもと，財団法人日本生物科学研究所上田理事長先生を始めとした多くの方々に，非常に細やかなご配慮，また公私に亘るご支援を頂きましたこと，改めて感謝申し上げます。

私事ではございますけれども，60 周年となりますと，私がこの世に生まれまして数年後に貴研究所

が誕生されたわけですから，「同じ時代を生きてきたんだなあ」と思いますと，非常に感慨深いものがございます。

貴研究所の前身であります社団法人日本生物科学研究所は，上田理事長先生及び布谷先生のご説明にありましたように，戦後まもなくである昭和 22 年に，立川に設立されたそうでございます。当時の日本社会の状況を考えます時には，混乱の極みの中の船出であったのではないかと推察申し上げます。そのような環境のもと，食料の確保が喫緊の課題とされる中，創生期の事業の立ち上げは非常に困難なものであったのではないかと，その御苦労に対し多大な敬意を表する次第であります。

設立以来，貴研究所は学術の振興と人類の福祉・増進に寄与することを理念とされ，生物科学，特に動物の生理及び病理に係わる学術研究の推進及びその成果の普及活動にご尽力されてまいりました。

そして，貴研究所は獣医学の基礎研究，さらに実

験動物に関するご研究等、長きに亘って獣医界のリーダーシップを担う研究機関としての実績を積み重ねられますと共に、現場に対する啓発・普及活動に力を尽くしてこられました事に対し、その御業績に対し改めて敬意を表する次第でございます。

近年、獣医界や獣医学が、これ程社会から注目を集めた時代はかつてなかったのではないかと思う訳でございます。人と動物の共通感染症を始め、食の安全・安心等、多くの課題が世間の注目を集めている訳でございます。

そのような状況下で、貴研究所の機関誌である「日生研たより」は、私も毎回楽しみに拝読させていただいています。中身を拝見いたしますと、日生研の研究成果の紹介はもちろんの事、最近の獣医学術に関します関連情報が掲載されており大変興味深い内容となっております。隔月とはいえ、昭和30年に創刊され、その後半世紀に亘って継続・発刊してこられたと聞いております。本誌は、我々をはじめ、国内外の大学、関連機関、研究所、それから官公庁等、第一線の技術者への情報普及ツールとして

重要な役割を果たしてこられてきたと思うわけでございます。

「継続は力」と申しますが、貴研究所が60年に亘り、継続して積み重ねてまいられました実績は、まさに我が獣医界が誇りとすべき「力」であります。

昭和30年代以来、すでに半世紀という長い間、ずっと学術の振興、さらに人類の福祉という理念を携えて来られた訳でありますけれども、時代がいかに変わろうともその理念は決して色あせず、我々獣医師がチャレンジし続けなければいけない課題であると再認識している次第でございます。

創立60周年を節目とされ、今後とも貴研究所が社会の要請に応え、着実に発展されることを願うものであります。

最後になりましたが、貴研究所の皆様のご健勝で、ますますご活躍されますことを祈念致しますとともに、本日ご臨席の皆様の更なるご多幸、ご健勝と、更なるご業績のご発展を期待致しまして、これにてお祝いのご挨拶に代えさせていただきます。

本日は、誠にありがとうございました。



## 祝 辞

社団法人 日本獣医学会  
理事長 佐々木伸雄

只今ご紹介戴きました、日本獣医学会理事長の佐々木伸雄でございます。まずは、貴研究所の60周年にあたり、心からお祝いを申し上げさせていただきます。また、このような祝賀会にお招き頂き、厚く御礼申し上げます。

今までのご祝辞の中でも触れられておりますので、今更と言う事になりますが、本研究所の設立の経緯及びその後の発展期は私にとってもあまり知らなかった部分であり、感銘を受けました。特に感染症に関する研究並びにワクチンの開発は日本社会にとっても大きな貢献であり、狂犬病などの重大疾患の撲滅ができたことにつきまして、日生研の果たした役割は非常に大きかったものと思っております。私自身は臨床分野であり、日生研の先生方との交流は必ずしも多くはなく、また研究内容についても正確に

は把握しておりません。しかし、獣医学会の活動に関しましては感染症、感染病理学、ウイルス学、細菌学、さらには公衆衛生学等の分野に非常に大きな功績を果たされており、獣医学研究における日本を代表する研究所であると認識いたしております。

また、山根先生からもご紹介がありましたように、日本獣医学会の学術集会に関しましても既に何回も開催を担当していただいておりますが、昨年3月には特別な学術集会をお引き受けいただきました。この集会は、日本獣医学会と日本獣医師会の年次大会が連携した初めての集会であり、またそれを記念して秋篠宮殿下をお迎えしての集会でした。開催にあたっては通常の学術集会とは異なる様々な準備が必要であり、大変な御苦勞をおかけしてしまいました。しかし、上田理事長、布谷所長を始め、研究所の皆

様方のきわめて周到なご準備と当日のご手配により、多くの参加者を得た立派な学術集会ができましたことにこの場をお借りして再度心からの感謝を表したいと思います。

本日、60周年という還暦を迎えられたわけですが、今後の日本生物科学研究所について、獣医学会といたしましては、従来から連綿と続けてこられた感染症や様々な疾病の病態に関する研究がますますご発展することを期待しております。同時に実験動物学あるいは実験動物を用いた新たな分野の研究が進ん

でいると聞いておりますが、従来からの日生研における研究を基に、それらの幅広い分野の研究がますます進展することを期待しております。また日本獣医学会としても、それらの研究成果を学術集会や学会誌でご発表いただくよう、希望いたしております。

最後に、このような式典が盛大に行われたことに対して心から敬意を表すると共に、財団法人日本生物科学研究所がますます発展することを祈念致しまして、お祝いの言葉とさせていただきます。



## 祝 辞

社団法人 日本実験動物学会  
理事長 芹川 忠夫

本日は、日本生物科学研究所創立60周年記念式典にお招きくださり、誠にありがとうございました。

創立60周年を迎えられたこと、心からお祝い申し上げます。

日本生物科学研究所の設立目的には、特に動物の生理および病理の研究・調査を通じて、学術の振興と人類の福祉増進に寄与すること、とあります。

私共の実験動物学会と直接関わる研究所として、日本生物科学研究所には、昭和41年(1966年)ですから、丁度、40年前に、山梨県小淵沢に附属実験動物研究所が設立されました。ここでは、各種実験動物の開発と生物科学の各分野の研究が行われています。

特に、ウサギ、ニワトリ、ハムスターにおいては、多くの遺伝的に均一な近交系が樹立されました。

また、ミニブタ、ニワトリ、ウズラにおいては、閉鎖集団として系統が樹立維持されてきました。そして、これらの新たな実験動物が基礎研究から応用研究にまで活用されるように、それぞれの利用性についての検討がなされてきました。

さらに、疾患モデル動物あるいはミュータントとして、日本ウズラでは、アルビノ、糖原病II型、筋緊張性ジストロフィー、ニューロフィラメント欠損、シリアンハムスターではミエリン低形成、減毛症、ニワトリでは、自己免疫性甲状腺炎、色覚異常

などが見出されています。

このように、日本生物科学研究所は、実験動物科学の分野において、先導的な役割を演じて来られました。

私自身は、文部科学省の委託を受け、ナショナルバイオリソース事業におけるラットの中核機関の代表を務めています。現在、458系統のラットを収集し、この中には新規に開発されたトランスジェニックラットや遺伝子変異ラットも含まれています。そして、主要な系統については特性とゲノムのプロファイルを明らかにしてデータベースとして公開しています。収集保存している系統については、国内外の研究者に広く提供しています。

このような事業が活発に動いていること、および私の所属する京都大学における医学研究科や他部局における動物実験の実施状況をみますと、生命科学の進歩は、未来においても実験動物に頼るところが大変多くあると思います。

其の点、実験動物の開発と利用を基礎とした研究がなされている日本生物科学研究所への期待も大きいものと思います。ついては、創立60周年を期に、日本生物科学研究所が益々発展されることを期待しまして、日本実験動物学会からのお祝いの言葉とさせていただきます。

## 創立 60 周年記念シンポジウムの開催

財団法人日本生物科学研究所 創立 60 周年の記念事業の一環として、平成 19 年 10 月 2 日、東京大学弥生講堂（一条ホール）にて、「新興・再興するヒトと動物の共通感染症—その現状と対策を探る」と題した記念シンポジウムを開催致しました。当日は、東大構内の银杏の葉も色づき始めて秋の気配が感じられる中、あいにくの小雨模様にもかかわらず、研究機関、教育機関、および家畜衛生関係者を中心に、全国から 200 人を超える方々にご参加頂きました。現在、世界的な問題であり、動物界のみならず人間社会をもおびやかしている様々な人獣共通感染症に関し、現在、わが国で第一人者としてご活躍されている先生方を講師にお迎えし、基礎研究から臨床応用、疫学、予防対策まで、最先端のご研究内容をわかりやすくご紹介頂きました。充実したご講演内容に、参加者は皆真剣に聞き入られておりました。各講演後には、熱のこもった討議が活発に行われて時間が足りなくなるほどで、お陰様をもって盛会裏に終了いたしました。ご講演をいただいた先生方に改めて御礼申し上げます。

(小山智洋)



東京大学弥生講堂

### プログラム

はじめに (林 志鋒)

記念シンポジウムの開催にあたって  
(布谷鉄夫)

#### ——午前の部（司会：布谷鉄夫・草薙公一）——

ヒトと動物の共通感染症—動物に潜む病原体  
(吉川泰弘・東京大学)

ウエストナイルウイルス感染症の疫学と診断  
(高島郁夫・北海道大学)

日本脳炎ウイルスの疫学と新型ワクチンの研究  
(倉根一郎・感染研)

狂犬病ウイルスと他のリッサウイルス感染症  
(山田章雄・感染研)

#### ——午後の部（司会：長井伸也・土屋耕太郎）——

自然界、家禽、家畜とヒトにおけるインフルエンザウイルスの生態 (喜田 宏・北海道大学)

病原性大腸菌 O-157 —ゲノム解析から見た病原細菌の多様性と適応戦略 (林 哲也・宮崎大)

腸管出血性大腸菌の排菌抑制による農場での制御を目指して (中澤宗生・動衛研)

サルモネラ全身感染症—上皮細胞侵入と食細胞内寄生の分子機構 (山本友子・千葉大)

食中毒としてのサルモネラ症—現状と予防対策 (中村政幸・北里大)

閉会の辞 (長井伸也)

## 創立 60 周年記念式典・祝賀会を終えて

財団法人日本生物科学研究所は、昭和 22 年 3 月 1 日に社団法人日本生物科学研究所として誕生して以来、今年で 60 年目を迎えました。この間、財団法人への改組、付属実験動物研究所（小淵沢支所）の開設、本所の立川から青梅への移転等を経て現在に至っております。

記念式典は、10 月 5 日金曜日、金木犀の香りもただよいはじめ、心地よい秋晴れの中、午前 11 時よりホテルオークラ東京 平安の間（東京都港区）にて挙行されました。

はじめに、60 年間の物故役職員の霊に捧げる黙禱の後、上田 進理事長が式辞を述べ、次いで布谷 鉄夫所長が創立 60 年の足跡について語りました。引続き、来賓の方々より祝辞を頂戴いたしました。

来賓の方々のお話を拝聴し、事業の発展に捧げた先人達の並々ならぬ努力を感じるとともに、関連諸機関の方々のご協力に支えられて本研究所が今日まで 60 年を歩んでこれたことを改めて実感しました。その後、内閣総理大臣 福田康夫氏、社団法人中央畜産会会長 小里貞利氏、北海道大学大学院獣医学研究科教授・人獣共通感染症リサーチセンター長 喜田 宏教授、ソウル国立大学獣医学部 Byeoung-Chun Lee 教授、日生研あけぼの会 川窪 淳氏、北里大学獣医学部学部長 伊藤伸彦教授、日本大学生物資源科学部学部長 酒井健夫教授他、内外からの多数の祝電の披露があり、閉式の辞をもって式典は厳粛に終了しました。

引続き、12 時半より別室で祝賀会が開かれました。部屋へ入ると、ハーブとフルーツの生演奏の中、中

央にブッフェ台が配置され、色鮮やかで豪華な料理が並んでいました。開宴に先立ち、長井伸也常務理事の挨拶と国立感染症研究所名誉所員 大谷 明氏の音頭による乾杯で祝宴が始まりました。祝賀会は終始和やかな雰囲気で行われ、参加された方々は楽しくご歓談されておられました。その後、矢澤 肇常務理事による中締めの後、吉村巖雄常務理事によるお開きの挨拶により、14 時半に祝賀会は盛会裏に終了いたしました。

なお、記念式典、祝賀会に御参加賜りました方に、記念品として、故中村稔治（元所長）著「一獣疫研究者の歩み」（岩波書店）及び記念出版物「60 年の歩み」が贈呈されました。

以上のように、当所の創立 60 周年記念式典および祝賀会を盛大に、且つ、つつがなく執り行うことができました。これもひとえに関係各位のご支援、ご協力の賜物と厚く御礼申し上げます。

（萩原純子）



記念品



## 財団法人 日本生物科学研究所 創立 60 周年記念誌「60 年の歩み」の編集

井土 俊郎 (記念誌編集委員会 委員長代理)

年が明け、60周年記念誌の編纂が決まり、編集方針の検討に入りました。当初、過去60年にわたる全ての研究業績の要約を収載したかなり重厚な記念誌の発刊を念頭におきました。しかし、多くの情報検索手段がある今日、要約を収載することの意義について改めて検討いたしましたところ、その部分は割愛することになりました。そこで本記念誌につきましては、創立以来の様々な出来事に関する記録に主眼を置いた内容とすることにいたしました。ただ、その時代時代に行われました主要な研究成果につきましては、年表の中に項目名のみ収載いたしました。研究所も遷暦を迎える時期となりますと、創立期の先達はすでにほとんど彼岸におられるため、過去の古い出来事の記録は、創立40周年および50周年記念誌の記載内容をそのまま、あるいは参考にして起稿いたしました。また、最近の出来事につきましては、事業報告書や行事記録などを参考にして起稿いたしました。

過去の歴史を整理する中で、社団法人日本生物科学研究所の設立前後の様々な出来事が記述されている「総合獣医学雑誌」、「日本獣医協会雑誌」あるいは「畜産発達史」などに目を通す機会がありました。当研究所の図書室には、戦前からの雑誌、本などかなり多くのものが所蔵されております。その中から長年の埃を被った古書を探し出し、ページをめくる毎に舞い上がった埃を振り払いつつ、関連記事

を探しました。該当する記事を見つけた時、当研究所創立の地である立川で起こっていた半世紀以上も前の出来事を感動をもって想像しながら、文書で残す事の重要性を強く印象づけられました。人類の長い歴史の中で、文字が果たした役割は計り知れない程大きなものだと思いますが、最近のように情報の授受も保管もすべて電子媒体で行われている事が本当に良い事かどうか、一抹の不安を感じます。活字世代の杞憂に過ぎないのでしょうか。

研究報告あるいは記事などには、そのときの時代背景が色濃く反映されております。古い書物を大切に保管している家庭には、その家庭の歴史の重みを感じます。現在、当研究所で保管しているこのような貴重な古書を、今後どのようにして保管すればいいのか、改めて考えさせられました。

本誌の発行に際しまして多忙の中、祝辞のご寄稿を賜りました先生方には心からの御礼を申し上げます。また、川窪淳先生には創立期の貴重な資料の提供、内容の確認など大変お世話になりました。改めて感謝申し上げます。先達の残した大きな業績を偲びつつ、ここに纏められた記録が、今日から新たな60年に向かって歴史を創って行く現在在籍中の職員、さらに長年にわたりご指導、ご鞭撻を賜りました多くの関係者の皆様にとりまして、本誌がなにがしかお役に立てましたなら大変幸甚に存じます。

日生研たより 昭和30年9月1日創刊(隔月1回発行)  
(通巻548号-特) 平成19年12月25日印刷 平成20年1月1日発行(第54巻第1号-特)  
発行所 財団法人 日本生物科学研究所  
〒198-0024 東京都青梅市新町9丁目2221番地の1  
TEL: 0428(33)1056(企画学術部) FAX: 0428(31)6166  
発行人 長井伸也

編集室 委員/小山智洋(委員長), 中村圭吾, 川原史也  
事務/企画学術部  
印刷所 株式会社 精興社  
(無断転載を禁ず)



—— テーマは「生命の連鎖」——  
生命の「共生・調和」を理念とし、生命体の豊かな明日と、研究の永続性を願う気持ちを心よいリズムに整え、視覚化したものです。カラーは生命の源、水を表す「青」としています。

表紙題字は故中村稔治博士の揮毫